アンデルセン童話研究（その3）

堀内　康人・一ノ瀬和子・井戸　裕子・高田　早苗

The Study of Andersen's Fairy Tales (Ⅲ)

Yasuto HORIUCHI, Kazuko ICHINOSE, Yuko IDO, Sanae TAKADA

How many children in the world can really appreciate well the fairy tales of Andersen in their early stage of life ? In respect to the subject-matter, we choose "an ugly duckling" from the Andersen's fairy tales. In their kindergarten life, 14 children who are from 4 to 6 years old have enjoyed "an ugly duckling" for about harf a year. In what way we can project "an ugly duckling" in their kidergarten life and how they experience this project successfuly is the first aim of our study. And then how they can understand well the spirit of "an ugly duckling" is the second aim of our study.

1. まえがき

アンデルセン研究家，平林広人はいっている[1]．『今日の日本では，アンデルセンの名は知らなくても，彼の童話のいくつかを知らないものはあるまい。彼の作品はそれだけ広く読まれたり，話されたりしている。だが，はたしてアンデルセンの作品が正しく理解されたり，鑑賞されたりしているであろうか。この疑問はただ日本だけの問題ではない。最近英国でも一般に言われている言葉に，「今日，クラシック文学のうちで，オスカー・ワイルド（1856～1900）を読むものはほとんどないのに，彼ほど理解されているものは少ない。ところが，これとは反対に，英語を話すもので，アンデルセンを読まないものはまずいないほどであるのに，その真意を理解しているものはほとんど見られない」といわれて，アンデルセンが読書界の問題になっている。これは，オスロー大学教授で，アンデルセン研究の新人エヤリング・ニイルセン（1920～）の言っているところである。1955年のアンデルセン生誕150年をさかいとして，アンデルセンの研究は，各国ともに新しい段階に入っている』と。われわれは，アンデルセン童話研究（その2）で，明治・大正そして昭和の初期に出版された“みにくいあひるの子”が一部のものを除いて，いかに商業主義的に俗悪化されて，子ども向きへと改作され再話化されていたかについて考察した。奥野庄太郎はその著「子どもアンデルセン」（大正14年）の序に[2]，「幼学年向きの簡単な言葉で，あの作者特有の情趣の生き動いた表現を移しかえることは到底出来ない，物語の筋を辿ったに止まっている。稍々高学年になって，本当のアンデルセンに向って，その力強い表現に再び魅せられることを望んでいる」と述べているが，結局アンデルセン童話は，再話的手法によればよる程その精神から遠ざかって行くであろうことが予想され，アンデルセン童話はもっと年令的に高い，児童の段階にならなければ，その高い文

学的香気と真髄を理解させることはできない。ところが現代の児童文学出版界は，その極端な縮少化と絵入りでアンデルセン童話を出版し，子どもの母親はそれを買い求め子どもに読ませ，その事実の中で安堵し，果して何がどのように子どもの心に定着し，それによって子どもの心情がどれほど豊かになったかについては，出版界も母親もあまり考えようとしない。そこでこうした現実をふまえて，この素晴しく良きものアンデルセン童話を幼児たちに，という情熱を燃やしながら，保育所の子どもたちの保育計画の中に“みにくいあひるの子”を組み入れ，どのようにしたらを工夫し，またどのように幼児たちに受けとめられているかについての客観的データを求めながら実践研究を進めたいと思う。

2. 研究の目的

どんな形で，アンデルセン童話“みにくいあひるの子”を保育所の保育に組み入れ，それによって子どもたちは，どんなに楽しい経験をくりひろげることができたか。その結果子どもたちが，どのように“みにくいあひるの子”を理解し，それが子どもたちの人間的成長につながっていったか，について考察をする。

〔1〕 実践研究園

・企業保育所（企業種目，ゴルフ場）　・父母の職業：父：会社員6，鉄道員1，公務員1運転手1，工員1，プロゴルファー1，不明1，死亡1，母：当ゴルフ場キャディー　・母の学歴：高卒7，中卒4，不明3．　・保育日：火旦日～日旦日，休日，月旦日　・保育時間：登園9時～9時30分，降園4時～4時30分

〔2〕 保育者と実験対象児

・保育者　4月より担任　経験年数　10年　・対象児　5，6才児7名（内男4名女2名）4，5才児7名（男2名女5名）計14名

〔3〕 実践期間

昭和49年2月19日～3月20日

〔4〕 幼児向きアンデルセン童話の中から適当と思われる“みにくいあひるの子”の選定

アンデルセン童話研究（その2）においては，アンデルセン童話を忠実に訳出したものとして，大畑末吉訳を基準にしたが，この研究では川崎大治の“みにくいあひるの子”（おはなしアンデルセン，昭和48年11月，童心社）を選んだ。その理由として (1) 大畑末吉訳（岩波文庫）と共通し

表Ⅰ　大畑末吉訳，川崎大治童話の字数比較

作者名	区分		1							2							3							4							5							6						
			総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?	総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?	総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?	総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?	総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?	総数	漢字	仮名	⋮	!	!	?
川崎大治	字	数	91	2	89					95	8	87					484	13	471		1			582	17	565	3	1			224	6	218	1		1		472	15	457	2	1		
	数	%	41	2	98					60	8	92					69	3	97					105	3	97					105	3	97					91	3	97				
大畑末吉	字	数	221	33	188			1		158	34	124					697	80	617					556	66	490		1	4	1	213	24	189			8		517	66	451			10	
	数	%	100	15	85					100	22	78					100	11	89					100	12	88					100	11	89					100	13	87				

て原作を忠実に子どもに伝えようとする情熱に意図がうかがえる。 (2) 会話がリズミカルで明るく楽しい。 (3) 全体として暖かい雰囲気に満ちている。

〔5〕 大畑末吉訳（岩波文庫）“みにくいあひるの子”と川崎大治再話“みにくいあひるの子”との字数比較

句読点は，仮名にふくめ感嘆詞その他は別に数え，アンデルセン童話研究（その２）と同じく12区分し，各区分毎に大畑末吉訳字数を100とした場合の比率を示すと，表Ⅰの通りである。

〔6〕 最初に“みにくいあひるの子”をどんな形で幼児に紹介したか

昭和48年11月初旬より午睡室に入る前に，担任保母が時折り読みきかせ，子どもがあきだしたら中止する。おはなしアンデルセンの本は保育室ピアノの上に常置する。来訪者があると，子どもたちは，ピアノの上にアンデルセンが置いてあると，楽し気に話す。12月に読み終る，読みきかせた回数は10回，各回における頁数は表Ⅱの通りである。p. はおはなしアンデルセンの頁数. 下段の数字はアンデルセン童話研究（その２）における12区分を示す。

表Ⅱ

1回	p.70〜p.71	2回	p.72〜p.73	3回	p.74〜p.76 8行目	4回	p.76 9行目〜p.78 7行目	5回	p.78 8行目〜p.79 8行目	6回	p.79 9行目〜p.80 11行目	7回	p.80 12行目〜p.83 9行目	8回	p.83 10行目〜p.86 10行目	9回	p.86 11行目〜p.88 4行目	10回	p.88 5行目〜p.93 11行目		
12区分	1. 2. 3.		4. 5.		6. 7.....7.				8.....8.				9. .....9.				10. ...10.		11.		12.

〔7〕 保育実践と研究の経緯

(イ) “みにくいあひるの子”を取り上げた保育の背景

昭和48年４，５月頃，昨秋から冬の間，守り育ててきた数々の花が次々に咲く，豌豆も花を咲かせ，やがて実を結ぶ頃，アンデルセン原作“５つのえんどう”（小出正吾‥子どもに聞かせる世界の名作，昭和48年12月発行，実業之日本社）を聞かせる。女の子を慰め，全快にまでみちびいた花の美しさ，しかしそのことをえんどう豆自身は知らない，ただ誰も見ていないし，誰も知らない所で一生懸命咲いていたことが，病気の女の子に生きる喜びと希望を与えていたのである。“困難にも負けず，自分の精一杯をすること”“誰かの為に役立つ人になるように”また“誰かのために役に立ちたいと願う子どもに”女の子がえんどうの花の上に手を組んで，丈夫になったお礼の祈りを献げたように，“感謝を知る子どもになってほしい”それがこの保育所の保育理念でもあった。

昭和49年２，３月頃，２月の下旬，水栽培のヒヤシンスは花の色を見せ，庭の木の芽，草の芽も

7							8							9							10							11							12							総数						
総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?	総数	漢字	仮名	⋮	｜	／	?
1817	38	1779	3	1	2		1983	80	1903	2		1		1199	40	1159	3				703	39	664	1				927	20	907					1529	79	1450	3	2			10105	357	9749	18	6	4	0
105	2	98					115	4	96					52	3	97					70	6	94					112	2	98					98	5	95					88	4	96				
1736	187	1549		3	26		1718	218	1500		4	16	2	2305	234	2071		1	18	7	998	151	847					825	103	722					1560	263	1297		3	11	2	11504	1459	10045	0	18	101	17
100	11	89					100	13	87					100	10	90					100	15	85					100	12	88					100	17	83					100	13	87				

ふくらみ始める。プラタナス，猫やなぎそして木蓮の芽もふくらみ，３月も半ばすぎる頃には，綻びはじめる。土の中でも種子や根，茎が色々な形で残っていて，芽を出す用意をしている。植物だけでなく，虫も冬越しをし，子どもたちは恵まれた自然環境の中で春をむかえる。こうした中で，子どもたちは寒い冬にたえる忍耐が必要なことも修得し，不思議な成長の力を知り，生命の神秘と尊さを知ることができた。小さな芽を見つけた子どもたちは“春を見つけた”と目を輝やかせ，春探しに夢中になる。各自の植木鉢には秋に植えたチューリップが眠り，冬の間かけてやった落葉を取除き，いつ芽を出すかと楽しみに待っている。組の畑にはビニールで簡単な霜よけをし日中は当番がビニールを取りはずして水をやり世話をした甲斐があって，ラッパ水仙は芽を出し伸びている。室内のかまきりの卵もその誕生を待って大切にしている。３月の声を聞く頃には，雛をかえす小鳥もそろそろ保育所のまわりの林にやってくる。こうした中で年長組は小学校にあがる日が，年少組は大きい組に進級する日が近ずいて，子どもの生活は喜びと希望にみたされ，感謝の気持に満ちあふれる。“みにくいあひるの子”はその内容からみて，この時期に実践を試みるのがよいのではないかと考えた。この組は４，５，６才児の混合であるから，４，５才児にももちろん読んできかせたが，３月に卒園する５，６才児を主たる対象として考えた。様々な困難をへて，最後に白鳥となり，今までの労苦を無にすることなく，精一杯生きた“みにくいあひるの子”の結末を，子どもたちの巣立ちへの意味と結びつけ，子どもの前途を祝福しながら実践研究を進める。

(ロ) 読みきかせ方

前述のように，５，６才児を主たる対象としたが混合組であるため，４，５才児の持続時間を考慮しながら，４回に分けて読みきかせをする。（　）内数字はアンデルセン童話研究（その２）における12区分を示す。

第１回：みにくいあひるの子誕生と母あひるの気持（１，２，３，４，５，６）

第２回：灰色で体が大きく，ぶかっこうで，他のあひるの子とあまり違いすぎるために，いじめられ仲間はずしにされ，悲しい思いをするみにくいあひるの子と母あひるの愛と嘆き。――あひる屋敷を逃げだし，沼に行き鴨にも笑われ，雁は声をかけてくれたが鉄砲で打たれて死に，みにくいあひるの子は恐れおののく。――沼から逃げだす一人ぼっちのみにくいあひるの子（７，８）

第３回：おばあさん，猫，ニワトリの住む家にしばらく泊めてもらったが，ここでもみにくいあひるの子は理解されなかった。――やがて青空と太陽と水を求めて出て行く。――秋の夕焼け空に翔ぶ白鳥の群を見上げながらその美しさにうたれ，どの鳥よりも懐かしく思う（９，10）

第４回：寒い冬，氷に閉じこめられたみにくいあひるの子は，通りかかった百姓に助けられ，生きかえったが，今までのつらい思いが誤解のもとになり，ここも逃げ出してしまう。心身ともに疲れたみにくいあひるの子だが，冬に耐え春が来た時，水に写る姿を見て自己を発見し，謙虚に喜びと幸わせをかみしめる。他の鳥も子どもたちも彼を賛える（11，12）（実施は２月19, 20, 21, 22日）

(ハ) この研究期間の保育所における保育目標

保育のまとめにあたる重要な時期である，この１ヶ月間の具体的目標は下記の通りである。

(1) ・木の芽草の芽，動物村の白兎の話をきいたりして春の来る喜びを知る　・木の芽草の芽に関心をもって探す。自分のチューリップに気をつけ，芽のでるのを楽しみにする　・みにくいあひるの子を最後まで聞くことができる　(2) ・木の芽，草花，雑草などの成長を見たり雛まつりをすることにより春が来たことを知る　・自然の変化を興味をもって観察し，春が来たことを喜ぶ　(3) ・見たもの聞いた話を絵話，劇遊びなどにして表現力を養う　・協力して出来ばえを気にすることなく一生懸命にする　・みにくいあひるの子の絵を描き話すこと

ができる　・互いに相談したり工夫したりして創造性を養い，楽しみながら，いたわり合いゆずり合う心を養う　(4)　・自分たちの成長に気づき，もうすぐ４，５才児は進級する，５，６才児は入学するという喜びを感じる　・あひるの子の童話を理解することにより，多くの障害にぶつかってもそれをのりこえて，心身共に大きく成長していけるように　・５，６才児は園生活最後の週であることを自覚し，お互に仲良く協力し合って園生活を楽しむ　・卒園式に向って１日１日を力一杯に過す　・現在の自分の生活の中に幸福を見出し，感謝の気持を持ち喜びと将来への希望を持つ

(ニ)　この実践研究に関連のある環境設定

○　読みきかせ開始と同時に環境の中に増し加えたもの　・実物――冬の木の芽（プラタナス，木苺，ねこやなぎ，雪やなぎ等10数本の木の枝を花瓶にさしておく）　・絵本――冬越しをしている動植物，冬の人間生活等を取り扱ったもの　・絵本――あひるが卵を暖め雛がかえる，あひるが列を作って歩いたり泳いでいる，ニワトリが卵を暖めている様子と孵化の状態等が示されているもの――葦の生えている沼に白鳥，鴨等の水鳥が泳いでいる。渡り鳥の様子，四季の沼の様子が描かれているもの　・鳥類図鑑　以上を本立てに増冊する　○　３月５日に増し加えたもの　・２月４日～３月４日この間は雛人形の寄贈を受けたので，保育室に飾ると子どもの興味はたちまち雛人形に集中したので，ひな祭りのテーマで保育は展開されていく。（この間の状況は略す）従って３月５日には，みにくいあひるの子の話を連想によって思い出させるために玩具等を用意する　・木製の玩具セット３組（組合わせて種類別にしておく）１組の数：あひるの子５，みにくいあひるの子１，母あひる１，猫１，ニワトリ１，犬１，大中小の木各５本，柵５，おばあさん１，百姓１，猟人１，子ども２，家大小各１，小鳥１，うさぎ１，りす１，・紙製の玩具セット１組　白鳥10，ベッド１，机１，椅子１，衝立１，長方形のお盆数枚，卵を背にのせた母あひる(木製)，あひるの子（プラスチック製，黄５，青１，つなぐことができる，ニワトリ（木製２）　○　３月６日に増し加えたもの　・絵本――みにくいあひるの子（浜田広介，昭和44年５月，偕成社）　・玩具――縫ぐるみの白鳥３（オルゴール入，桃色の羽２―曲はモーツアルトの子守歌，青の羽１―曲はシューベルトの子守唄），縫ぐるみの猫１　○　３月７日に増し加えたもの　・絵本――マイニチ絵本みにくいあひるの子

(ホ)　遊びの状況（みにくいあひるの子に関連のあるものの一部分を示す）

○　子どもたちは読みきかせ第１日目から増し加えた本を目ざとく探し出し，非常に興味を持ち次々に本立てから取り出して来て，絵本や図鑑を中心にあちらこちらで会話が行われ，集りの時に読んでほしいと担任保母に要求するものもあって毎日１回ずつ読むことにする。歌やリズムの指導もそれに合わせてすることを計画する。例えば冬越しをしている動植物の絵本では“春を呼ぼうよ”の歌唱指導，卵のふ化の個所では雛の誕生を祝う歌，あひるの子たちが遊んでいる個所では“あひるの行列”の歌をうたいあひるの子になって歩いたり，池にとび込む時にはボチャンといって，とびこみ泳ぐのが大好きである。第３回目の話をきいたあとは猫やニワトリやみにくいあひるの子の大好きな太陽のリズム遊びをする等楽しい生活を繰返しながら子どもたちは春を待ち続けていた。

○　前述のようにひな祭りの次の日，保母が木製や紙製の玩具セットで箱庭式にそれぞれ長方形のお盆に４場面を作っておく（あひる屋敷，沼，おばあさんの家，春の白鳥の池)。子どもが登園するとそれをみて“これどうしたの”ときく，保母“みにくいあひるの子のおはなしですよ”と説明する。子ども春の池の場面を見て“もっといい考えがある”といって机上に出して作り替える。

次々に登園してくる子どもたちも作り替えて遊ぶが最後の場面の春の池を好んで作る。

○　木製の母あひるとプラスチック製のあひるの子を使って遊ぶ。卵を背負った母あひるの後にあひるの子をつないで引っぱって歩く，“あひるの行列”の歌をうたいながら列を作って歩かせたり，1羽ずつはなして泳がせたり，“私たちはみにくいあひるの子も仲間に入れて上げているのよ”“仲よしだもの”等といいながら遊びを続ける。子どもたちに童話が鮮明によみがえり楽しい活動性を発揮した。春の池ではみにくいあひるの子の白鳥はどれにしたらよいかと相談し，沼の場面もドンドンと鉄砲の音を口に出しながら何時の間にか全体が森になって木の合間に兎やリスをおいて楽しむ。プラスチック製のあひるの子は保育室から廊下，それをへだてた広い保育室へとひっぱって歩いたり，途中で会話をしたりしながら遊びまわる。黒板には何時の間にかあひるの子が数羽描かれ，その中の一羽は首の長い大きなあひるである。水かきもていねいに描かれている。

○　絵話を作る　黒板のあひるの子の絵から保母は絵話作りに誘う。5，6才児の欠席が多いので好きな場面を描くことにする。Tは卵を暖めているところを描きNはみにくいあひるの子が生れたところを話し合いの上で描く。保母“景色は描かないの”T“景色って何”N“景色というのはね草や空のこと”T“うんわかった”N“先生本を読んでくれたらわかるから読んで”保母は一区分の個所をゆっくり読んで聞かせると“わかったよ描くよ”と二人は草や木，川，空，太陽等を描きたし満足そうである。他では絵話は順番があるからとお互いに順番をきめて描く。描きながら出来たらこの紙芝居をしようと異句同音にいう。何時の間にか紙芝居になっている。自分たちが描いた絵の話をさせて見ると大体は理解出来ているが，4，5才児中の1名は自分の生活と混同していた。

○　子どもたち3羽の縫いぐるみの白鳥をみて大喜びする。縫いぐるみの猫は“おばあさんの家の猫ね，でも抱くと気持がいい”という。子どもたちは連板で池を作り，白鳥を並べる，他のグループは積木で囲いを作り，あひるの子を2羽いれ“あひるの行列”の歌をうたいながら遊ぶ。他のグループは積木で作った正方形の囲いの中に暖炉を作り，あひる，ニワトリ，猫をいれてそれぞれの役を演じ，またみにくいあひるの子（浜田広介）の絵本を熱心に見ている子どももいる。

○　前日作った紙芝居を見せた後，不足の個所を話し合い，3名の子が自発的に受け持って描く。

○　午睡の音楽は白鳥のオルゴールにする（曲はシューベルトの子守歌）子どもたちは白鳥にそろって目を向け楽しく聞き，寝つきの遅い子どもも早く寝る。子どもたちは午睡の音楽は毎日白鳥のオルゴールにしてほしいという。（一週間これを続けた）

○　ある子どもは猫の玩具が大好きではなそうとしない。ある子どもは登園すると真先に白鳥を抱く。この様にみにくいあひるの子の玩具は大好きなものとなる。保母の誘いでおばあさんの家を作る。猫ニワトリあひるの対話は子どもの大好きな個所だけに活発に行われる。マイニチ人形絵本みにくいあひるの子は詩の形式を思わせリズミカルなので喜ぶ。数名の子どもブロックで池を作り，母あひるとおばあさんあひるの対話をした後あひるの子を列にして歩かせたり泳がせたりして遊ぶ。

○　子どもたちが作った紙芝居を読んで聞かせ，子どもたち熱心に見る。子どもたち，ようやく夕焼空の場面の不足に気がつき一人の子どもが描く。

○　机2台を合わせて木製紙製の玩具セットの一部，縫いぐるみの人形，玩具の椅子その他を使って春の池を作り白鳥を置きながら1人の女児は“白鳥になったからお母さんはびっくりしているだろう”といいながら“これを絵に描きたいなー”といい描き出す。1枚では足りなくて4枚つなぎの画になる。他の子もそれに影響されて描き出す。

○　木製紙製玩具セットでおばあさんの家，森，沼を作って遊ぶ。小型積木でおばあさんの家やそれに続く庭を作るなど，次第に他の要素が加わって豊かさを増してくる。

○　劇遊びはひよこが生まれたところがやりたいとの子どもの希望で配役を決めて楽しく遊ぶ。

○　ままごとコーナーではご馳走を作って，保母とあひるの子たちを招待する。食後はあひるを散歩に連れてゆき，その場で池を作り泳がせて楽しむ。この遊びは午後も続き，３羽の白鳥にご馳走を作り，食後は白鳥にテレビを見せるのだとマイニチ絵本を，本立てから取り出し“先生がして見せて”という。そこで保母が読む。次は子どもが読むと順に４回も読まれた。劇遊びはおばあさんの家をする。

○　５，６才児が劇遊びは白鳥になったところをやりたいと希望するので，配役を決めてやる。５，６才児はこの場面が大好きである。

○　協同画は４，５才児５，６才児と分れて相談する。５，６才児は早くまとまり，白鳥が泳いでいる場面を大きく描く，空は夕焼けが美しいからよいと赤，橙などの色を使って塗る。４，５才児は相談はしているが一向にまとまらない。保母があひるの行列はどうかしらと助言するとただちに“そうしよう”とまとまり描き始めるが，各自が画用紙の四方から描くので５，６才児が笑うが皆一生懸命である。協同画は翌日まで続きかわるがわる描く。５，６才児の画も岩，水草，白鳥も沢山ふえる。考えが一致しないで言い合いをする場も少々あったが，互いに歩みより，ゆずり合い楽しい雰囲気であった。４，５才児は四方から自由に，にぎやかに描くので意見の衝突もない。劇遊びは全体を通して遊ぶ。役柄は５，６才児は白鳥の希望が多く，４，５才児はどの役も喜んで受ける。

○　各自画用紙にみにくいあひるの子のいろいろな場面を描く子が多くなった。また白鳥を描いては切り抜をし粘土や空箱で製作をして楽しむ。これらは劇遊びの小道具に使用し，卒園式の装飾にも使われた。

以上が毎日の保育からみにくいあひるの子に関連のある子どもの活動（保母も含めた）の１部分のあらましである。子どもは４回に分けて話を聞いた段階において深い印象と一応の理解を持ったのではないだろうか。“創造活動の根底には理解がある。理解のないところに創造はあり得ない”みにくいあひるの子の童話に関連した遊びが２週間あまりも続けられたことは，この素晴らしい文学作品の印象が感動を興し，子どもたちに生々とした行動をなさしめたのではないだろうか。遊びのなかでは心情についてはあまり言葉には現わさなかった子どもたちも教育的刺激に出合うと，たちまち受け入れた内容と結びついて思考し，童話の中の人物と共にする生活を生々と始め，理解は深められていき，保母はその中で保育目標達成をも計ることが出来た。最後の協同画は空は夕焼けがよい，美しいからよいと異句同音にいい，保母が青空を提案しても不同意を示し，子どもたちは夕焼けに決めてしまった。子どもたちこそアンデルセンの真意を感じているに違いない。童話の主人公に同情共感をおぼえて主人公の勇気と謙虚さに心を打たれ主人公の幸せを心から喜んでいるに違いない。そしてここから理屈ぬきに生きぬいて行かなければならない人生への勇気を汲取り“もう駄目だ”と思われる時に誰かに愛の手を差しのべられたあひるの子，寂しい時に夕焼け空をとぶ白鳥の群に出合い，ほのかな憧れを持ち慰められたあひるの子。それだけに白鳥になって自己を発見した喜び，仲間を得た喜びは，子どもたち自身の大きな喜びであり，彼らは希望に満ちた幸わせ一杯の心になったのではないだろうか。

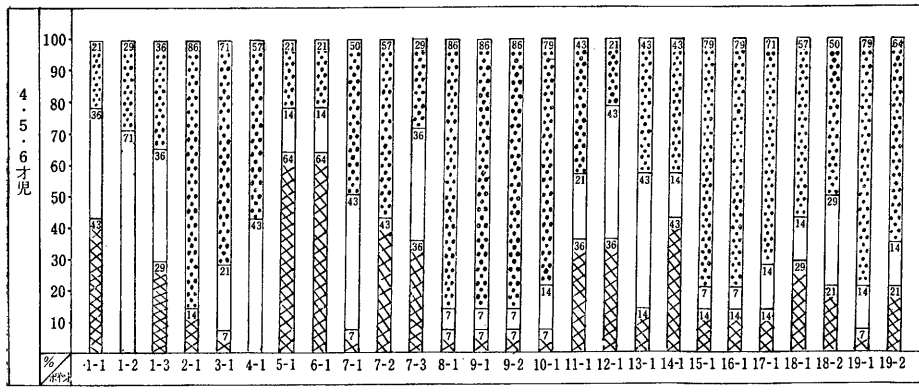
〔８〕　みにくいあひるの子の場面理解の実態を知るための絵本作成経過と，それを使っての幼児の言語表現の考察

(イ)　みにくいあひるの子を幼児がどのように理解しているか，絵本をみながら幼児にその場面に

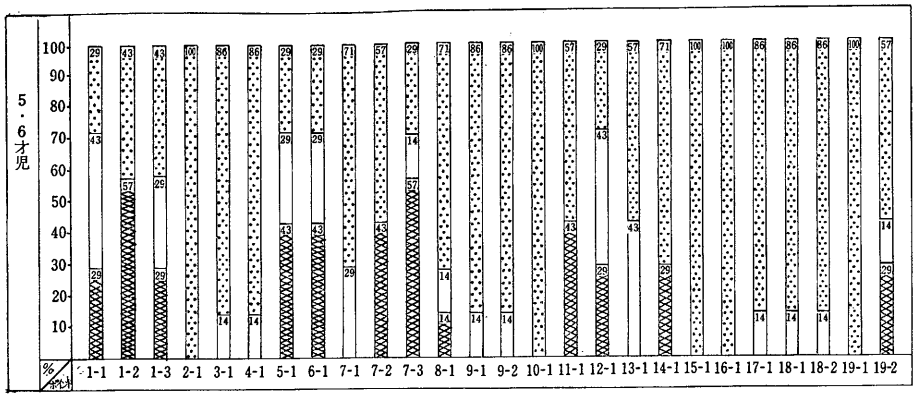
ついて話させる。話しの手がかりとしてひろすけ絵本“みにくいあひるのこ”（昭和44年５月偕成社発行）の字の部分をかくし，また必要でないと思われるページはこれを除き，さらに不足場面を描き加えたものをあたえ，幼児の話しをテープにとり，記録整理検討する。整理に際しては幼児の言語表現を３段階に分け（内容を正確にとらえて表現できる――[∴∴∴]，ほぼとらえて表現できる――[　　]，表現できない――[×××]）各場面が何を物語っているかの中心点（ポイント）にてらし，幼児の言語表現を評定した。ポイントの内容は表Ⅲの通りである。図Ⅰは，４，５，６才児全体14名の各ポイントに対する言語表現を表わし，図Ⅱは５，６才児７名の各ポイントに対する言語表現を表わし，図Ⅲは４，５才児７名の各ポイントに対する言語表現を表わしている。

表Ⅲ

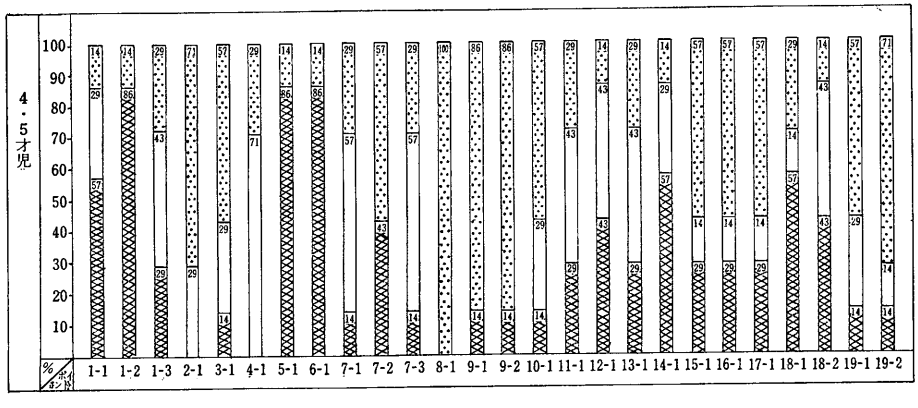
ポイント	内　　容
1-1	かえらない大きな卵　それは七面鳥の卵かも知れない
-2	そんな卵をかえすより　ほかのひよ子に　泳を　教えたらといわれる
-3	母あひるは　あたためつづける
2-1	みにくいあひるの子が生れる
3-1	仲間の鳥たちに　いじめられる
4-1	みにくいあひるの子だけが　餌をもらえないで　いじめられて　逃げて行く
5-1	１人さびしく　沼に来る
6-1	野鴨たちと　みにくいあひるの子
7-1	猟師が　鉄鉋で　野鴨をうっている
-2	みにくいあひるの子が　かくれている
-3	犬が眼前にあらわれ　いってしまう（やっぱり自分はみにくいからだ）
8-1	沼（草むら）から　でてゆき　おばあさんの家をみつける
9-1	おばあさんの家……おばあさん、猫、にわとりがいる
-2	猫とにわとりとみにくいあひるの子の会話（君はのどをごろごろ鳴せるかい　卵をうめるかい）
10-1	みにくいあひるの子は　青い空　太陽を見たくなり　水の中で　泳ぎたくなる
11-1	みにくいあひるの子は　家を出て　青空の下　水の上を泳ぐ
12-1	秋になって　あひるの子の　さびしい姿
13-1	夕焼空に白鳥がとぶ景色をながめる
14-1	さむい冬
15-1	氷ついた　みにくいあひるの子を　百姓が助ける
16-1	百姓屋で子どもたちが　みにくいあひるの子と遊ぼうとしたが　またいじめられるかと思って　おどろいて逃げ出す状景
17-1	逃げ出して　寒い冬中　沼でくらす
18-1	春になって　白鳥が三羽　およいでいる
-2	白鳥の仲間に入れてもらえるかどうか　とまどう
19-1	白鳥になった自分を発見する
-2	子どもたちに　美しい白鳥だといって　ほめられる



図Ⅰ



図Ⅱ



図Ⅲ

(ロ) 結果の考察

(1) 幼児が大変良く言語表現し，それを通して理解していると思われる場面は，ポイント２―１“みにくいあひるが生れる”，８―１“沼（草むら）からでてゆきおばあさんの家をみつける”，９―１“おばあさんの家，おばあさん，猫，ニワトリがいる”，９―２“猫とニワトリとみにくいあひるの子の会話”（君はのどをごろごろ鳴せるかい，卵をうめるかい）の４場面である。これは４，５才児，５，６才児ともに共通している。

幼児の遊びの中でも“君はのどをごろごろ鳴せるかい”“いいえ”“君は卵をうめるかい”“いいえ”など猫とニワトリとみにくいあひるの子の会話の所が大好きであるなどは，ことばのリズムが良いことにより子ども達に大変おぼえやすく，また猫がのどをごろごろ鳴すこと，にわとりが卵をうむという事柄がわかっているので，大変良く理解出来たのではないかと思われる。

(2) ポイント19―１“白鳥になった自分を発見する”場面の理解は５，６才児は100％，４，５才児が57％が内容を正確にとらえて表現できるがこれに対し，ポイント19―２“子どもたちに美しい白鳥だといってほめられる”場面の理解は５，６才児57％に比べ４，５才児71％を示している。

5，6才児は白鳥になった自分を発見する場面が一番印象的であるのに対し，4，5才児は子どもたちに美しい白鳥だとほめられている所が印象的のように思われる。5，6才児は自己を白鳥におきかえた時，自己発見に喜びを感じ，4，5才児は他からあたえられたものに対する喜びを強く感じとっている所に差がみられる。

劇遊びを何回も行っている中で，5，6才児は最後の白鳥になって遊ぶ場面を特に演じたがるが，4，5才児の場合どの場面でもどんな役柄でも喜んで演ずる。ここにも内容理解の差が感じられるのではないかと思う。

(3) 適切に言語表現できず理解しにくいと思われる場面は，ポイント5—1“1人さびしく沼に来る”。6—1“野鴨たちとみにくいあひるの子”の2場面で，4，5才児，5，6才児ともに共通している。しかしながらその内容を年令別にみると，5，6才児は43%，4，5才児は86%の理解の悪さに大きな差がみられる。これは読み聞かせの段階において，沼の場面と野鴨との会話はあまりおちつきがなかった。沼・葦・鴨などは図鑑などで説明したが，やはり経験しないものは，理解が十分なされないのではないかと思われる。

(4) “内容を正確にとらえて表現できる”と“ほぼとらえて表現できる”をまとめ，“表現できない”をまとめて比較してみると，全体（ポイント1—1から19—2の言語表現度の合計パーセント）を100%とし，それに対する前者は，5，6才児の場合83%であり，4，5才児は68%であり，後者は5，6才児の場合17%，4，5才児は32%となる。

特に言語表現のできないポイントは，5，6才児の場合ポイント1—2，7—3の2個所，43%，に比べ4，5才児はポイント1—1，1—2，5—1，6—1，14—1，18—1の6個所で16%となった。しかしながら幼児の場合個人差が大きく，5，6才児に勝る言語表現のできる4，5才児もあり，5，6才児の中にも話すことができない幼児もあったことは見落せない。

〔9〕 子どもは作中典型の心情理解をどんな言葉で表現しているかについての考察

ここでは，子どもたちが，みにくいあひるの子をどれほど理解しているだろうかということから，もっと掘り下げて，それぞれの場面に登場する典型に対する心情的理解をどんな言葉で表現しているか，その様相を，子どもたちの言葉を通して考察することにした。

(イ) 方法

童話の筋を追って20枚のカラー写真を作成，子どもひとりびとりによろこんで写真を拾わせながら実験者と子どもの対話をテープに収め，それを整理検討する。もちろん対象児の数が少ないので了解心理学的な考察にならざるを得なかった。写真提示の方法は一度に写真全部を与えるのではなく，筋を追い4枚，3枚，6枚，4枚，3枚（計20枚）という順序で子どもの前にならべ，実験者の質問に従って拾わせながら対話を進める。その状況の一例を示すと次の通りである。

・かあさんあひるが巣をつくり，巣を暖めているところの写真はどれですか　・大きな卵はようやくわれました，どんなあひるの子が生れましたか，その写真は　・どんなところがみにくかったの　・あひるの子は，あひる屋敷のみんなからどんなにされたの，その写真は
・お母さんはどう思ったの

(ロ) 結果の考察

○ いじめられているわが子に対する親の心情理解

（質問： みんなにいじめられたり，仲間はずしにされたりしたときの，かあさんあひるの気持はどんなだったでしょう）

わが子が目の前でいじめられたり，仲間はずしにされたりしているのを見て，母親のじっとして

おれない不憫な，いらだった，悲しい気持を子どもたちはどのように受けとめているのだろう。悲しい気持，かなしいとする子ども（４名）かわいそうだと思う（２名）いけないと思う（１名）よろこばない（１名）つつかれたの（１名）他のヒヨコだけもらえて，あひるの子だけもらえなかったの（１名）といじめられる状景説明におわる子どももいるが，いやな気持（４名）という言葉で表現する子どもの多いのが目立っている。複雑な母あひるの心情をいやな気持という漠然としたいい表わしかたで表現し，まだ適切な言葉を使えないもどかしさが感ぜられる。

○　いじめられているみにくいあひるの子をみて，子どもはどう思うか

（質問：　××ちゃんだったら，こんなにいじめられているあひるの子をみてどんなに思いますか）

かわいそうだと思う子ども（９名）が多数を占め，なかにはいやな気持（１名）かなしい（１名）よくない（１名）きらい（１名）そしていじめられているみにくいあひるの子を，いい子いい子する（１名）となっており，かわいそうという心情理解の言葉はよくつかえるようになっていることがわかる。

○　いじめられているみにくいあひるの子に対して，子どもはどんな行為をしたいか

（質問：　××ちゃんだったら，みにくいあひるの子にどうしてあげたいと思いますか）

たすけてやりたい（１名）やさしくしてやりたい（１名）かわいがってやりたい（１名）と同情的行為を概念的にはっきり表現する子どもが３名いるが，ほかの子どもはしばらく答えをためらいながら，具体的におりこうにしてあげる（なでてやる）（１名）うちでかってやる（１名）ごはんたべさせる（１名）えさをやる（１名）いい子いい子してやる（１名）だっこしてうちに入れて……（１名）考えてもわからない子ども（５名）となり，そのうち４名は４～５才児であった。たとえ４～５才児でも，たすけるというような言葉を使用していても，こうした場面になると一般化された形でそれがでないで，具体性をもった言葉になってしまうのであろう。然し必ずしも一般化された概念表現がより深い心情理解につながるわけではない。

○　あひるやしきを逃げだす，みにくいあひるの子の心情理解

（質問：　あひるの子は，どんな気持であひるやしきを逃げだしたの）

いじめられて，あひるやしきを逃げだすときの，みにくいあひるの子の複雑な心情を，いかにも子どもらしく，いやな，さびしい，悲しい気持と表現する子ども（１名）だれも遊んでくれないからかなしい気持（１名）ぼくはひとりで暮すんだ，かなしいの（１名）と具体性をもたせて表現し，さびしい気持（２名）ここでもまたいやな気持（５名）が多く，こわかった（１名）無回答（３名）となっている。

○　あひるの子と猫，ニワトリとの会話に対する子どもの感想

（質問：　猫とニワトリはどうしてお部屋のすみっこにいなさいなどといったの）

この場面は会話のやりとりの面白さが見事にえがかれている場面である。５～６才児は，猫のようにのどをごろごろいわせたり，にわとりのように卵を生めないから，そうしたことがなにもできないから（５名）とはっきり答え，へんなあひるだから（１名）わからない（２名）と答えているが４～５才児になると，みにくいから（２名）さびしいから（１名）わからない（１名）そして１名は４～５才児とおなじで，なにもできないから（２名）となり，原因結果の思考のとぼしさを示している。

○　夕焼空を翔ぶ白鳥を眺めるみにくいあひるの子の心情理解

（質問：　あひるの子はどんなことを思いながらながめているの）

5～6才児は全員7名が，僕も白鳥になってとびたいと思っていると答え，その内1名はそう思いながら複雑なあこがれの心情を，寂しい気持でいい気持と言い表わしている。4～5才児も無回答1名をのぞき6名は言葉は明確ではないが，白鳥になりたいと思ったの，あんなにきれいになりたいのといった表現で理解している。

○　氷りついたあひるの子を助けてくれた百姓の心に対する理解

（質問：　そのときのお百姓さんの心は）

親切な心という言葉を期待したが，それをききだすことはできず，いい心という表現で答えたものが5名，無回答1名，残りの子どもはみな百姓があひるの子をかわいそうだと思ったと説明しながら，かわいそうな心と答え，親切という概念使用のむずかしさを物語っている。

○　百姓家の家族の好意をなぜ誤解したかについて

（質問：　あひるの子はお百姓家をあわててにげだしました。どうしてにげたの）

またいじめられるかと思った（10名）とはっきり理解し，なかには前の情景と混同し，また鉄砲でうたれるかと思って（3名）元気がでたからお母さんの所へ行きたいから（1名）となっている。

○　沢山の白鳥を見たときのあひるの子の心情理解

（質問：　沢山の白鳥が池でおよいでいるのをみてあひるの子はどう思ったの）

4～5才児2名は無回答，泳ぎたい（2名）仲間に入りたい（2名）好きだと思った（1名）となっているが，5～6才児になるとそのときの複雑な心情を，いっしょに仲間に入って遊んだり泳いだりしたい，でもみにくいからやめようか，ひょっとするとまたつつかれるかも知れない，ころされるかもしれない，でも池にうつった自分をみるともうみにくくないから仲間に入ろうなどと，全員がみにくいあひるの子の複雑な心情理解をしている。

○　水に写った白鳥をみたあひるの子の心情理解

（質問：　水に写った白鳥の姿を見て，あひるの子はどう思ったの）

あひるの子の姿が白鳥となって水に写ったときの感激を4～5才児1名をのぞいて全員，僕は白鳥になったのだ，うれしい（5名）白鳥になったのだ，大きくなったの（4名）白鳥になっていい気持（2名）きれいな姿だな（1名）白鳥になった気持ちょっとはずかしい（1名）となっており，感激という表現はなかったが，それぞれの言葉に力強さがみちあふれていた。

〔10〕 実践研究のまとめ

アンデルセン童話にたたえられている文学的精髄は，われわれ大人でもそれを真に理解することはむずかしい。しかし大人がそれを読んだときの感動を子どもたちに伝えたいというのは，大人たちの願いである。日本においても多くの文学作家・児童文学者がそれを求めて努力してきた。

われわれは，幼児の段階でそれを伝えることはできないかと考え，この実践研究にとり組んだ。幼児の段階では，単に目と耳から絵本の形で与えるだけでなく，子どもの生活に“みにくいあひるの子”に関連のある具体物，玩具等をもちこみ，様々な形で子どもの遊びを展開させ，保育の計画の中にそれを正しく位置づけることができれば，幼児たちにも，みにくいあひるの子の感動を伝えることができることを確認した。

この作品につめこまれている詩情や典型の複雑な心理描写，そして機知と皮肉，心をゆり動かすような心情の流転を幼児に十分にはつかませることはできなかったが，その初歩的な理解には成功したと考える。それは実践の中で幼児が生き生きと喜んで活動したこと，簡単ではあったが，その理解度を子どもたちの言語表現と関連させて知るための実験を通して知ることができた。この実践

研究によって，幼児たちにアンデルセン童話みにくいあひるの子によって愛と悲しみ，忍耐と憧れ，挫折と救いの生活感情を初歩的に刻印できたことを喜びとするものである。

そして最後に，こうした実践研究を通して，アンデルセン童話みにくいあひるの子を絵本にして幼児に与える場合の様々な現実的諸問題，例えば沼の場面などが子どもには大変理解しにくいこと，場面説明のことばなどの適合性などに関して，はっきりした批判をもつことができ，こうした実践研究をもとにしてはじめて理想的な絵本づくりがなされねばならないことを知ることができた。（この論文はキンダーハウスの保母西村和子氏の協力を得たことを附記する。）

註

1） 平林広人著，アンデルセンの研究，東海大学出版会，（1967）

2） 奥野庄太郎著，こどもアンデルセン，イデア書院，（1925）